

# とっても短いおはなし集

## 青春のおはなし編

eru

## 『二人で一人』

---

教室のベランダで、柵に腕と顎を乗せる。グラウンドでは、野球部とサッカー部のやつらが必死になって練習をしている

「あーやっぱ俺も運動部、入ればよかったかなあ」

メガネの岡部は、ため息をついた

「いや、無理だろお前、そんなひょろい腕じゃ」

「や、蹴るほう」

「足もひょろいじゃんよ」

ガタイのいい大塚は、岡部の透けてしまいそうな白い腕を見遣った

「大塚こそ、運動部入ればよかったのに」

「いろんな部からオファー受けたけど、俺団体行動苦手だから」

「だよなー。ぽいよなー」

二人して黙り込む。眼下には光る汗と土煙。

人が一生懸命がんばっている姿は、なんてカッコいいんだろう

髪を染めても、ピアスを開けても、彼らのカッコよさには追いつけない

「俺がお前の体を手に入れたら、間違いなくスポーツ選手を目指すのに」

岡部が言った。それは冗談っぽくなくて。

「俺がお前の頭を手に入れたら、間違いなく宇宙飛行士を目指すのに」

大塚が言った。こちらは大真面目だ

「何、お前宇宙飛行士になりたいの」

「・・・うん」

大塚の成績はクラスで下から数えたほうが早いと言うか一番下かもしれない  
ちなみに岡部は学年で一番だ

「俺は、医者にもパイロットにもなりたくないから、サッカー選手になりたいよ・・・」

こんなこと誰にも言ったことがない。言ったとしても、まともに取り合ってもらえない  
けど、大塚なら、自分の気持ちを分かってもらえると思った  
俺たちは全く正反対のようできて、実は似ているから。

「でもさ、体格はともかく、頭は勉強すればよくなるから、今からならまだ間に合うよ

がんばって勉強しようぜ」

「・・・俺、できる気がしねえよ・・・」

「大丈夫。俺が教えるから」

「ほんとか!？」

「うん。だからさ、たまに、サッカーしようぜ」

岡部は小さい頃から運動神経が良なくて、サッカーに混ぜてもらえなかったのだ

「いいぜ。じゃあ、今日から俺らはサッカー部員な」

「おお～いいな、部員って響きがいいな」

顔を見合わせて、笑った

自分にはないものを持っている友人を味方につけて、今、夢に向かって一歩踏み出した

こんなに綺麗な桜の下で、なぜこんなに汚いことができるのだろう

「おい、何やってんだ」

「あー・・・なんだっけ、たしか・・・頭いい人だ」

いわゆる不良座りでタバコを燻らして、男のくせにかなり細い眉をちょっと上げて大塚は言った  
「岡部だ」

同じクラスになってから二週間ほど経つのに、まだこいつは俺の名前を覚えてないらしい  
うちの学校で俺の名前を知らないやつはほとんどいない  
成績優秀者は試験が終わるたびに名前と点数が張り出される  
その一番右端に、いつも俺の名前があるからだ

「タバコ、消せよ」

「うるせえなーお前、誰？風紀委員？先生？ママですか？」

大塚はにやけながら言ってきた。こいつを見てると、イライラする

大塚もまた、学内で名を知らないやつはいない  
背が高く、髪は金に近い茶髪で、いつも目をギラギラさせている  
校則に逆らって髪を染めたりネクタイをしめなかったりするの、  
もうかなりダサイことなのに、こいつはまだまだやめないつもりらしい

「お前みたいな“いい子”見てると、むかつくんだよ」

「俺は、お前みたいな“悪い子”見てるとむかつくよ」

互いに、睨み合う。傍から見れば、俺が大塚に一方的に凄まれているように見えるだろう  
大塚はおもむろに立ち上がると、短くなったタバコを俺の手に押し付けた  
じゅっと嫌な音がした

「・・・へえ、我慢強いんだ」

「勉強できるヤツはたいてい我慢強いよ。頭いいヤツは、勉強が好きなんじゃなくて  
好きでもない勉強を我慢してできるやつだからな」

「そんなもんか」

「そんなもんだ」

大塚は新しくタバコを一本取り出し、火をつけてから俺の口に突っ込んだ

「・・・うまい？」

「全然」

俺がそう答えると、大塚は嬉しそうに笑い、頭上で舞う桜を見上げた

「うるせえやつが来るから、もうここでは吸わねえよ」

それは桜に言ったのか、俺に言ったのか、分からなかった

「じゃあな」

大塚が去った後、俺は木の根元に腰を下ろし、大塚のにおいがするタバコをふかした

裏庭に一本だけ生えているこの桜の木の下は、人目がなく、隠れて悪さするにはもってこいだ

ポケットを探って、灰皿を持っていないことに気づいた

「・・・あいつ、持ってたかな」

引き留めればよかった、と舌打ちした

俺がここに来た理由が、大塚と同じだと知ったら、あいつはどんな顔をするだろうか

俺が吸っているタバコは、大塚のほどにおいはきつくないけれど。

「・・・こんなに綺麗な桜の木の下で、俺はなんて汚いんだろう・・・」

見上げれば、煙で濁った色の桜が、儚いものを象徴するかのようには散っていた

## 『雨でも晴れでも僕らは』

---

今日はツイてない。どうやら遠くで雷も鳴っているようだ  
母親の忠告を無視した罰だ。まさに天罰。  
学校と家の中間地点で雨に降られた。中学生にとってはビニール傘を買う金も惜しい  
慌てて駆け込んだのは、シャッターの閉まっている店の軒下だ  
「どうすっかなあ・・・」  
空を見上げてても晴れ間は全く見つからず、雲が重くのしかかっている  
濡れた制服のシャツが肌にぴったりと張り付いて気持ち悪い  
止むのを待つか、濡れて帰るか。すでにずぶ濡れなのだから、走って帰ったほうがいだろう  
このままでは風邪をひくこと請け合いだ  
よし、走るぞ、と決意をした瞬間、目の前に傘が差し出された  
「え？」  
傘に隠れて、差し出してきた人物の顔が見えない  
「あの、」  
声を掛けても返事がない。ザーっという雨音がうるさい  
「入ってくか？」  
傘を上げて、彼が言った。同じクラスの、大谷だった

それが大谷と初めて交わした会話だった  
家が近所だったとそのとき知って、それからたまに一緒に帰るようになった  
と言っても、学校から一緒ではなくて、たまたま会った時にだけだ  
俺は学校からは別の友達と帰るからだ  
俺と大谷は全く違ったタイプの人間で、教室でも全然話さないし、  
あの雨の日まではほとんどお互いのことを知らなかった

「昨日、ネットでうちの生徒の悪口が書き込まれてたの知ってる？」  
隣の席で女子がひそひそ声で話している  
今流行のやつか。俺はそう思って聞き流していた  
「ねー知ってる？木崎」  
急に名前を呼ばれ、反応に遅れた  
「・・・ん？いや、知らない」  
「誰がやったんだろーしかもね、うちのクラスの子が書かれてたらしいんだよね」  
「あ、じゃあさーあいつ怪しくない？大谷」  
俺の体が硬直した。まさかここでやつの名が出てくるとは。  
「暗いし無表情だし、何考えてるのかわかんないじゃん」  
うわーどうしよう。あいつこんなこと思われてんのかー

「ね、ね、聞いてみようよ」

好奇心旺盛なおバカな女子たちは余計なことをしようとしているらしい

「やめとけよ。あいつじゃねえよ」

「何よー。じゃあ犯人知ってるの？」

「知らないけど、あいつはそんなことしない」

「なんでわかるの？木崎、大谷と仲良かったっけ？」

「まあね・・・」

俺は曖昧に返事をした。仲がいい、と言うほどでもなかった

でも、大谷がそんな愚かなことをするようなやつじゃないってことを

わかるくらいには仲良くなっていた

次の日、1時間目に遅刻してしまった俺は、教室へは向かわず、トイレに行った

2時間目から授業に出ようと決めた俺は、どこで時間を潰そうかと考えながら、トイレに入った

「・・・？」

中から、声が聞こえてきた

「おい、俺たちの悪口書いたのお前だろ！」

「お前なんかいなくなっちまえ！」

聞き覚えがあるような、ないような・・・

中を覗くと、うちのクラスの悪ぶってるやつらが、一人の男子生徒を囲んで怒鳴り散らしていた

「新井・・・？」

中心にいるのは、同じクラスの、背が低くて目立たないタイプの男子だった

「新井、何してんだよこんなところで」

俺は涙で顔をぐちゃぐちゃにした新井に近づいた

「木崎、邪魔するなよ。こいつが何したか教えてやろうか」

「いいよ。興味ない。お前ら授業どうした」

「お前こそどうした」

「俺はいいんですー。漏らしそうだから来たんですー」

俺は新井の腕を取って引っ張ろうとした

「だからやめろって」

中学生にもなってガキ大将みたいな森下が俺の手をはたいた

俺はその手を取って捻り上げた

「痛っ・・・！」

それからは殴り合いだった。普通は。俺はそんな面倒くさいことをしたくないので、

新井の手を取って急いでトイレから出た

ちょうど1時間目が終わったところだったので、廊下にはたくさんの生徒が出てきていて

森下たちに追われずに済んだ

「あ、ありがとう。木崎くん・・・」

新井がか細い声で言った

「お前いつもあいつらにパシリにされてるだろ」

「うん・・・」

「もう2度と助けないよ～男は1人で強くならなきゃいけないからな」

「・・・聞かないの？」

「何を？」

「俺が悪口書いたんじゃないかって」

「だから興味ないって」

「・・・そう」

教室に戻ると、大谷と目が合った

「・・・遅刻、しちゃった」

「そうだな」

「今日、一緒に帰らねえ？」

「・・・なんで？」

「たまには。いいじゃん」

「まあ、いいけど・・・」

腑に落ちない様子で大谷は言った

下校中、たいした会話もせずに二人で歩く

俺はなんだかもやもやしていて、空は晴れているのに、ちっとも気分が良くなかった

「・・・なんかあった？」

大谷が見抜いてきやがったけど、何も言わない

「お前が不機嫌だと、俺もなんか嫌なんだけど」

そう言ってうつむいた大谷を見て、俺は胸が苦しくなった

なんか、やるせない

こんなに優しい大谷が疑われてしまうことも、

あんなにまじめな新井がいじめられてしまうことも。

俺みたいに適当にへらへら笑って過ごしていればこんなことにはならないのに。

不器用だけど一生懸命生きているやつらばかり損してしまうんだ

「森下、ぶっ飛ばしてえな」

俺は小石を蹴りながら言った

「やめとけ、損するぞ」

「そうそう、そうなんだよ。いい子でいたほうがバカ見ないで済むんだよ」

それは、大谷に向けて言ったつもりだった

無口で、滅多に感情を出さない大谷は、誤解されやすい

もっと自分を出して、自分がどういう人間かを分かってもらったほうがいいんだ



でも、俺は今のままの大谷が好きだし、だからこそみんなに大谷のよさを分かってもらいたい  
そのためにはどうしたらいいんだろう

答えはどこにあるんだろう

・・・明日の授業で習うのかな

## 『何にでも染まれる自由』

---

飲み干して、地面に落とした  
カラン、と軽い音がして、コロコロと転がるペットボトル  
「おい、何やってんだよ」  
俺は思わず隣を歩くマサトに声をかけた  
「拾えよ」  
そう言っても、マサトは俯いてペットボトルを見ている  
転がったペットボトルに追いついて、やっとマサトはそれを拾い、しげしげと眺めた  
「俺はペットボトルになりたい・・・」  
ぼそっとマサトが言った  
「は？」  
俺は聞き間違えたかと思い、聞き返した  
「ペットボトルってさあ・・・何色にでも染まれるじゃん  
お茶入れたらお茶、コーラ入れたらコーラになれるじゃん  
なんか、自由でいいよな」  
マサトは前方を見つめたまま訳の分からないことを呟いている  
今はマサトの手の中で肌色に染まっているペットボトルを握り締めながら。

マサトは普段はしっかり者で、物静かだ  
目立つほうではないけれど、みんなが一目置いている  
頭もいいし、運動もそれなりにこなす。いわゆる優等生だ  
でも、時々ふっとおかしなことを言い、独り言だか俺に話しかけてるんだかわからないトーンで話し出す  
マサトとの付き合いも長いから、俺はそういうのに慣れているんだけど、  
でもやっぱり彼の言うことはよくわからない

「ほら、こうしたら、青空が入ってるみたいだ」  
マサトはペットボトルを上に向かって突き出した  
透明のペットボトルの向こうに、空が見える  
「青空は、飲んだらおいしそうだよな。くもりはまずそうだけど」  
「う～ん・・・わかるようなわからないような・・・」  
「お前だったら、何を入れたい？このペットボトルの中に」  
マサトが聞いてきた。俺は、質問の意図も、どう答えたらいいのかもわからなくて、しばらく黙った  
「虹色、入れられたらいいのにな」  
俺より先に、マサトが口を開いた

「すごいたくさんの色をこの中に閉じ込めたい。ずっと見てても飽きないような。見るたびに色が違ったらおもしろいのにな」

「つまり、どういうこと？」

怪訝な顔をした俺を、マサトはちらっと見て笑った

「俺は、いろいろな表情を出せる人間になりたい

『マサトってこういう人間だよな』って決められたくない

ま、どーせ、お前にはわかってもらえないんだらうけど」

わざとらしくため息をついて、マサトはペットボトルを真上に放り投げた

くるくると回り、光を反射するペットボトル

『きれいだ』

と俺らが呟いたのは、同時だった

## 『決戦前夜』

---

「あー静かだなー」

海岸沿いを大股で歩く達也は、満天の星空を見上げながら言う  
明日は関東大会決勝。僕らのチームはここまで順調に勝ちあがっている  
でも、明日の相手は強豪だ。一度も勝ったことはない

今日、準決勝を勝ち抜いた僕らは、そのあと軽いクーリングダウンをして  
夕食後に自主練をした。明日のために余力は残しているものの、  
部員はみんな疲れていて、熟睡している  
僕とエースの達也は、興奮して眠れずに、こうして夜の海を散歩しているのだ

「東京ではこんな星空見たことないよな」

達也は海と空を交互に見て「綺麗だ」と呟く

「お前、寝なくていいのかよ。明日、大丈夫なのか」

僕は達也の背中に声を掛ける。達也は振り向かずに答える

「いいの。明日の相手は俺が寝ても寝なくても強いし。俺は全力でぶつかるだけだ」

「頼むよ。あいつとまともに戦えるのはお前だけなんだから」

相手校のエースは個人戦で全国大会の上位に残る、まさに強敵だった

「任せろ。なんか、勝てそうな気がする」

「気がする・・・ねえ」

根拠のない自信に、僕はため息をつく

うちの部員に、明日の試合に勝てる自信を持っているやつはいないだろう  
でも、誰もが勝ちたいと思っているのだ

「俺は、もっともっと強くなって、一番になりたいんだよ」

ふいに、達也が言った

「関東大会で優勝して、全国大会でも優勝したい」

急に夢のような話をしだす達也を、僕は驚いて見つめた

振り返った達也の目は、星の輝きが映ってきらきらしていた

「頂上に立たなきゃ見えないものってたくさんあるんだぜ」

県大会の個人戦で優勝した達也は、僕が見たことのない景色を見たことがあるのだろう

「昔から、社長になりたいとか、総理大臣になりたいとか、天下統一したいとか、  
俺はそんなことばかり言ってる。周りの大人は呆れるか、笑うかだけどさ  
大人はみんな一番になることの難しさを知ってるんだ  
どんなにがんばったって無理なことがあるって知ってるんだ

でも俺は、まだそれを知らない。やる前から諦めるなんて、しない  
大人の言うことを聞けって言われるけど、聞いてたら未来への希望なんてなくなっちゃうよ  
まだまだ楽しいことが待ってるって思いたいじゃんか  
あと80年生きるとしても、俺らの今までの人生の何倍もあるんだぜ」

子供の頃は楽しかった、なんてことをよく耳にするけど、大人ってそんなにつまらないものなの  
のか

僕らはまだ子供だから、毎日を一生懸命生きているだけで、今が一番楽しいとか  
そんなのよくわからない

「・・・それって、監督の注意を無視する理由にはならないからな」

僕がそう言うと、達也は肩をすくめて「ばれたか」と言った

「とにかく、明日は勝つ。そんで、その先も勝ち続ける」

達也は自信たっぷりに言った。彼に一番プレッシャーがかかっていることも、

彼が一番不安なものも、僕は知っている。でも、僕の前で強がる達也を、僕は頼もしく思う

明日も、がんばろう

「この世に必然などあり得ない！」

机を挟んで向かい側に座っている俺の友達、小浜は、かなり怒っているらしい  
拳で机をドンッと叩いて「お前もそう思うだろ！？」と俺に尋ねてくる

「なんっで俺がフラれなきゃならないんだ！」

最後のほうは涙混じりになって声が滲んだ。どうしようもなく落ち込んでいる

「俺の何が悪いってんだ・・・？」

容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群（全て自称）の小浜は机に突っ伏してしまった  
もうかれこれ1時間も彼の泣き言に付き合っている俺は、いい加減うんざりして

「もう帰るよ」と言ったが、

「そんなこと言うなよ～俺失恋してんだよ！？慰めろよ」

慰めろよって。命令？命令してまでしてもらうもん？友の慰めって。

「お前なあ、フラれてもしょうがないよ。相手は学校一の美女だろ？」

「でも俺は学校一の美男子だ！」

「それ、自分で言うことじゃないから」

「もし、この世に必然と言うものがあるなら、当然あいつと俺は結ばれなくちゃならないんだ  
だって、学校一の美女と美男はくつつくべきだろ？」

なんだ、その理論。めちゃくちゃだ

「お前、そのゆがんだ性格なんとかしないと」

「ゆがんだ性格・・・？」

自覚がないんじゃ、直しようがないけどな。

俺はこのどうしようもないやつをどうしようか思案しながらカバンを手に立ち上がった

「おい、本当に帰っちゃうのかよ」

非難がましい目で見上げてくる小浜。捨てられた子犬か、お前は。

「必然はなくても、偶然ならあると思うよ」

俺は椅子に座りなおしながら言った

「どういう意味？」

小浜が聞いてくる

「お前が告白したその美女、俺の彼女なんだよね」

小浜は、ぼかんとした顔で俺の言った言葉の意味を咀嚼している

その間抜けな顔がおかしくて俺はつい吹き出した

「何度も言ったよな。俺、あいつと付き合ってるって。お前一度も信じなかったけど」

小浜はまだ理解していないようだ。俺は再び立ち上がって教室を出た

後ろのほうで、小浜が「ま、待て！」と言っているのが聞こえたが無視した

小浜が学校一の美女に恋してから、俺は小浜に連れられてその美女とよく話をした  
そして小浜が美女と二人きりになれるように途中でそこから抜け出した  
全部小浜に頼まれてやったことだった。代わりにジュースをおごってもらっていた  
でも、美女が好きになったのは俺のほうだった。小浜の努力は完全に逆効果だったわけで。  
美女から告白されたとき、俺は当然断ろうと思った。  
小浜にさんざん協力しときながら、もしこの告白を受ければ、完全に裏切り行為だ  
だが、相手は学校一の美女。中の下のルックスのこの俺が、全てにおいて小浜に劣っている俺が  
、  
美女に選ばれたのだ。これからの人生で、こんなことはもう二度とないだろう  
俺は、思わずOKをしてしまった  
その日、家に帰ってすぐに小浜に携帯で謝った  
だが、小浜は信じなかった。まさか、俺みたいなのがあの美女に相手にされるわけがないと。  
俺は謝った自分がバカみたいで、悔しくて、そして優越感に浸った  
小浜を出し抜いてやったのだ。今、俺は男として最高に幸せだ

思えば、必然なんかありゃしない、という小浜の主張は正解だ  
俺と美女が付き合えるなんて、偶然じゃなかったらなんなのだろう  
ただ、今日小浜が俺の彼女に告白してフラれるのは必然だった  
なぜなら、彼女は俺と付き合っているのだから。  
彼女はきっと小浜にこう言ったに違いない  
「私、付き合っている人がいるの」

これから俺は彼女と会う。彼女は俺をそのかわいい顔で責めるだろう  
「なんで、小浜くん私と付き合ってること言ってないの？」  
そして俺はこう答えるだろう  
「だってあいつ信じないんだもん」  
全部、やっぱり必然かもしれない。明日学校で小浜と会ったら、殴られることも。

## 『守りたいもの、一つだけ』

---

親友に、彼女ができた。正直言って、つまらない  
俺は毎日あいつと一緒に遊んでいたし、学校の行き帰りも一緒だった  
一日の大半、一年のほとんどをあいつと一緒に過ごす、という日々がここ数年続いていた  
あいつにとっては初めての彼女で、どうしたらいいかわからなくてよく俺に相談してきた  
あいつよりは恋愛経験のある俺は親切に色々手ほどきをしてやったんだけど。  
今のあいつには彼女しか見えていないし、それは当然だと思う  
でも、やっぱり寂しいよな。いつもあいつとばかり一緒にいたせいで、俺は他のやつらの輪の中に  
飛び込めないでいる  
一人きりの帰り道。夕日も、午後五時の鐘も、いつも二人で聞いていたのに  
なんで、こんなに胸が詰まるんだろう・・・

あいつは子供っぽくて、勉強も運動もダメで、俺に頼ってばかりいたのに、今はなんだか俺の  
ほうが支えを失って困っている。依存していたのは俺のほうだったのかもしれない  
まあ、あいつが振られるまでは我慢することにしよう  
『お前だけだよ』  
数日前にそう言ったあいつの真っ赤になった顔を思い浮かべて、一人笑う

「こんなこと相談できるの、お前だけなんだからなっ」  
「はいはい、わかったわかった。で？デートに着ていく服を選べって？」  
「うん。あ、それと誕生日プレゼントも一緒に選んでくれ！」  
「めんどくせ〜・・・」

あいつにとって、俺だけが親友で、あいつだけが俺の親友



## 『サイン』

---

俺の幼馴染の悠一はものすごくわかりやすい  
いつも遅刻ギリギリで学校にくるから、寝癖がひどく、制服のネクタイも首に引っ掛けてだけで  
教室に入ってくる  
それなのに、好きな子ができると髪はバッチリ決めてくるし、ネクタイは彼が一番かっこいい  
と思っているちょっと緩めの結び方をしてくる  
それを見て俺はいつも「あー好きな子できたんだなあ」と思うくらいで特に気にも留めない  
そして、まただらしのない格好に戻ると、「あー振られたんだなあ」と思うだけだ

今日の悠一はチャイムと同時に教室に走りこんできた  
「間に合ったー。なあ、今日宿題あったっけ」  
「それを聞いたら昨日聞いとけよ。今からやっても間に合わないだろ」  
「浩太くんのを写させてもらおうかと思って」  
満面の笑みで言う悠一の頭をぺしっと叩いて俺は憤然と言った  
「見せないし、今日は宿題出でない」  
「なんだーよかった」  
ほっとした悠一はさっそく机に突っ伏して寝息を立て始めた  
「お前、さっきまで寝てたんだろ？」  
俺はあきれて問いかけたが、答えは返ってこなかった

ここ最近彼女のいなかった悠一が久しぶりにきちんとした格好で学校に現れた  
17年間付き合っている俺も見ただことのないくらい気合が入っている  
「今回はずいぶん本気だな？」  
「そうなんだよ。すごいかわいいんだ。っていうかももう付き合ってるんだけどね」  
相手は近くにある女子高の生徒らしい。確か、お嬢様学校だ  
「よく捕まえられたな」  
「俺にできないことはない」  
悠一はかなり自分に自信を持っているらしい  
事実、女には結構もてる。俺は悠一のだらしのないところやしょうもないところも知り尽くしている  
ので、俺が女だったら絶対悠一のことなんか好きにならないのだけど。  
「浩太、あのな？俺はお前が思っているよりずっと男前なんだぞ？」  
悠一は俺に”自分はいい男アピール”をよくしてくる  
「まず背が高い。スポーツができる。頭もいいし、顔もいい。朝は苦手だけどかわいい子に会う  
ためだったら早起きできる。な？完璧だろ？」  
その聞き飽きた自慢の数々に俺はうんざりしながらも適当に相槌を打った  
悠一みたいな男は同姓から嫌われると思うのだが、不思議と悠一の周りには人が集まってくる

特に高校に入ってから遊びまくっていて、悠一はいつも家に帰るのが遅いらしい  
悠一の母親が俺の母親に「浩太くんを見習って欲しいわ。まじめなものね、浩太くんは」と言っているのを聞いたことがある

「浩太、聞いてるのか？」

例のかわいい彼女ができてから1週間ほど経ったある日、いつものように悠一の自慢話を上の空で

聞いていたとき、悠一が俺の顔を覗き込んできた

「聞いてる聞いてる」

「じゃあ了解ってことでいいんだな？」

「ああ」

「よしっ決まり！」

「え、何が？」

「これあいつに渡しておいて！」

悠一は一枚のCDを俺に渡すと「じゃ、俺はバイトがあるから！」と教室を出て行った

「まだHR終わってないのに・・・っていうかあいつって誰？」

俺はよくわからないままCDをカバンの中に入れ、HRが終わるのを待ってから校門へ向かった  
校門の前に悠一の彼女が通っている女子高の制服を着た女がいた

「もしかして・・・あいつってあの子のことか？」

俺は恐る恐る声をかけてみた

「あの、悠一の彼女さん、ですか・・・？」

「あ、はいそうです。浩太さんですか？悠一から聞いてます。本当は悠一にCD返してもらうはずだったんだけど急にバイトが入ったからって・・・」

「そうですか。あ、これCD」

「ありがとう」

悠一の彼女は確かにかわいかった

彼女はぺこっと頭を下げて去っていった

悠一の歴代の彼女の仲でも1, 2を争うかわいさだった

俺は悠一のだらしなさを知っているから、なんだか悔しかった  
なんであんなヤツにあんなかわいい彼女ができるんだ！？

家に着くと同時にメールが来た

「CD渡してくれた？」

悠一からだった。渡した、と返信したら、「ありがとう！マジ助かった！」ときた  
明日学校に行ったら「かわいかったら？」と自慢されるに違いない

俺は憂鬱な気持ちで明日の授業の予習をした

「浩太、昨日は悪かったな」

「いや、別にいいけど」

次の日の朝、背後から声を掛けられた。悠一の声に元気がなくて俺は振り返った  
俺は目を瞠った

「お、まえ・・・どうしたんだよ」

悠一はこれ以上ないくらいだらしのない格好で立っていた

髪はボサボサだし、ネクタイは首にかけてすらいらない。昨日までしていた薬指の指輪もなくなっていた

振られたんだ、と一目みて分かった。でも、確かに昨日までは幸せそうだったのに。

「早くないか？別れるの」

「俺から振ったんだ」

「え？」

悠一から振るのは俺の記憶では今まで一度もなかったはずだ

いつもいい加減な性格がばれて振られるのは悠一のほうだった

「あいつ、男いたんだ。大学生の」

「あー・・・」

「昨日それ知って。あいつの友達から聞いたんだ。CD返すのに会う約束してたけど・・・でも、どうしても会いたくなくて。それでお前に代わりに返してもらったんだ」

「・・・・・・・・。」

なんと言っていていかわからなくて、黙り込んだ。自尊心の強い悠一にとって、浮気されたことは非常なショックに違いない。振られたときより、傷ついて見えた

慰めの言葉なんて、今まで掛けたことがなかった。いつだって悠一は、すぐに立ち直るんだ

俺の哀れみの目を一番嫌うんだ。俺の前で弱みを曝け出さないんだ

俺の前では悠一はいつだって平気な顔をしているんだ

「なんで、お前が泣きそうなの？」

悠一が言った。俺はその言葉に慌てて俯いた

「お前はいつも俺が傷つくと泣きそうになるよな。泣きたいのは俺なのに、なんでかおまえが先に泣きそうになるから、俺は泣くタイミングを逃すんだ。だから俺は慰められなくても泣かなくて済む。お前が俺の代わりに泣いてくれるから」

「な、泣いてない！」

「泣いてないけど、泣きそうだろ？なんか悲しいんだろ？俺のためにそんな顔するなよ

小さい頃からそうだったよ。自分が傷ついたときは泣かないくせに、俺が悲しいときはお前も悲しい顔するんだ」

「知らない、そんなこと」

「俺は知ってる」

「・・・・・・・・。」

「俺らもう、大声上げて泣くことなんてできない年になったけど、悲しいときはお前がそばにいてくれるから俺は泣かなくても大丈夫なんだ」

よくそんな言葉を恥ずかしげもなく言えるな、と俺は思った。でも、なんだか嬉しかった

「あ、今お前嬉しいだろ」

「えっ」

「お前が首に手を当てるときは嬉しい証拠なんだぞ」

確かに俺は左手を首に当てていた

「な、なんでそんなこと・・・」

「自分で気づいてなかったのか？」

「全然」

心を見透かされて俺は恥ずかしくなった。俺は悠一のことなんでも知ってると思ってたけど、悠一も俺のことをよく知っているんだ。俺のサインを見逃さないんだ

「それで、悔しいときは腕を組んで、寂しいときは耳を触って・・・」

悠一は俺の癖を挙げ始めた

「お、おいもういいよ！」

「はは、お前のことなら何でも知ってるもんね」

いたらっぽく笑う悠一は子どもの頃から変わっていなかった

俺は悔しいから、腕を組んで悠一を睨みつけた

## 『曇り時々晴れ』

---

「俺さ～君と友達になりたいんだけど」

いきなり目の前に現れたむかつく笑い方をするその男は、そういつてからずっと屋上に入り浸っている

ここは俺の昼寝場所だというのに。

「お前ウザい。授業出るよ」

「じゃあ原田もでなよー。原田も出るんなら俺も出るし！」

この男は”不良”とお友達になりたいらしく、この学校で一番の悪と言われている俺に目をつけたらしい

「お前はなんで不良と友達になりたいんだよ」

サボり場所を何度変えてもまわりついてくるこいつにある日俺は聞いた

「あ、いや、それは口実っていうかー。俺は別に不良と友達になりたいんじゃないくて、原田と友達になりたかったんだ。だって原田って背高くてかっこいいし喧嘩も強いしー俺の憧れなんだよ」

そういつてヤツは俺をキラキラした目でみつめてきやがった

気味悪い、といつたらヤツはひどく落ち込んでしばらく沈んでいたが、すぐに元通りになって

「好きな食べ物は？趣味は？」などとどーでもいい質問を連発してきた

「原田一タバコは体に悪いんだよお。あのさ、俺サッカー一部じゃん？体力なくなるの困るんだよね・・・でも原田とは一緒にいたいし。あ、でもタバコやめろっていうんじゃないよ？俺といるときだけはタバコ吸うのやめてもらいたいなーって思って・・・あ、やっぱだめだよね・・・」

自分から俺のそばに居座っておいてずいぶん勝手な言い分だ。俺がヤツの願いを聞き入れることはなかった

「杉山、お前最近原田と仲良いんだって？」

ある日職員室でヤツの担任とヤツが話しているのをたまたま聞いた

「うん。めっちゃ仲良いよ！原田って見た目怖いけど実はけっこういいやつでさー」

無邪気に話すヤツに担任は険しい顔で答えた

「何言ってるんだ。お前最近授業もサボってるそうじゃないか。成績も落ちてるし・・・原田についてはいい噂は聞かん。悪いこといわないからあいつとは付き合うな」

「原田、最近なんで屋上こないの？まじめ宣言？」

職員室での会話を聞いてから、俺は授業をサボらなくなった。このままヤツと一緒にいれば、先公に何を言われるかわからない。叱られ慣れてる俺でも、他人のことで責められるのはごめんだ

「お前人のクラスにまでくるなよ。俺はもうお前とは会いたくない」

そう言ったときのヤツの顔は俺が今まで見た中で一番悲しい顔だった

「原田、なんで？俺何か悪いことした？何かしたんなら謝るからさ、そんなこと言わないでよ！」

泣き出しそうになるヤツを俺は慌てて屋上に連れて行った。教室にいたやつらが俺らを見て何事かと驚いていた

「お前・・・なんでそんな顔するんだよ。別に俺に会えなくたって困らないだろ？お前にはたくさん友達がいるし。それに俺と一緒にいたらお前だめなやつになっちゃうよ。だから、な？もう会わないようにしよう」

「嫌だ！俺は原田と一緒にいないとだめになる！俺はいつも愛想笑いばかりで・・・友達に本音も言えないし。でも原田にならなんでも話せるんだ！原田と一緒にいるときは気を使わなくていいし・・・とにかく、俺はお前が好きだ！友達やめるなんて言うな！」

なに告白してんだお前は、と思いながらも、今までこれといった友達がいなかった俺はこんなこといわれたことがなくて、なんだか嬉しかった

「わかった。わかったから泣くなよ。俺とお前がいつ友達になったか知らないけど、もう会わないなんて言わねえよ」

そのときのヤツの嬉しそうな顔を見たら、友達って言うのも案外悪くねえかもな、なんて思えた

「原田～！！」

「お前またきたのかよ！暑苦しいからどっかいけ！」

「ひどいよ～あれ？タバコなんで消しちゃうの？まだ長かったのに・・・」

「別に」

「あ、わかった！俺のため？ねえ、俺のためなんでしょ？」

「だーっうざい！お前のためじゃねえよ！」

こいつとはもうしばらく付き合うことになりそうだ、と半ばうんざりながらも俺はなんだか嬉しい気持ちを抑えきれずにいるのだ

## 『夏休み』

---

「「あー帰りたくない」」

放課後の教室に二人の男子の声が重なった

教室には他に生徒は居らず、暑さを凌ぐための下敷きをパタパタさせる音だけが聞こえる

「なんで帰りたくないんだよ」

「お前こそ」

中学3年生の二人は今日から夏休みだというのに浮かない顔をしている

背が高く肌の浅黒い少年——小森大地は机に腰掛けて、椅子に座っているもう一人の少年——  
—宮下優を見下ろしていた

「お前の家すっげー涼しいじゃん。アイスもあるしゲームだってあるし・・・こんなところにいるよりよっぽどいいと思うけど。俺ん家なんて扇風機しかないんだぜ？」

「扇風機があるならここよりマシだろ。帰れば？」

宮下は小森を見上げて冷たい視線を送った

「なに、お前機嫌悪いの」

「別に」

宮下は頬杖をついてため息をついた

「帰ったらどうせ勉強しろってうるさいんだ。それに、今日から夏休みなんていっても塾があるし。遊んでる暇なんてないんだよ。まあ、受験生だから仕方ないけど。お前はいいよな、スポーツ推薦でいけるんだろ？」

「そうだけど・・・。いいじゃん。お前頭良いんだから」

「よくないよ。俺がいい成績とるのにどれだけ勉強してるか知ってるだろ？それくらい勉強しなきゃいい点取れないんだよ俺は。頭いい奴はちょっとの勉強でできるんだよ」

「いや、どんだけ勉強してもできない奴はできないって。お前はやればやるほどできるんだから。がんばれよ。行きたい高校あるんだろ？」

「俺が行きたいんじゃない。親が行かせたいんだ」

「・・・お前、親孝行はしとくもんだぜ」

小森は12歳のときに両親を亡くしている。宮下もそれを知ってるから、これ以上親への文句を言うのはやめた。小森がスポーツ推薦を取るのにどれだけがんばったかも知ってる。それでも宮下には、普段自分のうちに秘めている不満をぶちまけられるのは、小森しかいないのだ

宮下はふと、机の中にあったものさしを取り出した

「これもう使わないな。捨てようかな」

「使うかもしれないから取っとけよ」

でた。小森の貧乏性、と思ったが宮下は口に出さない

「だって、こんなものじゃ何も測れないよ」

「は？何言ってんの？これ、測るためのものだから」

「そうだけど。・・・幸せの大きさは、こんなもんじゃ測れないだろ？」

幸せ、なんて言葉が中学生の口から出ること自体なんだかおかしいな、と宮下は自分で言っておいて思った。小森は宮下の手からものさしを取り上げて、

「まあ、俺たちの幸せなんて所詮これくらいの大きさだろうな」

そう言って、その30cmものさしをゴミ箱に向かって放り投げた

ものさしはクルクルと回転しながらカラン、と音を立てて空のゴミ箱に消えた